慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近世漁村史料の研究(野村豊著, 三省堂發行)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1957
Jtitle	史学 Vol.30, No.1 (1957. 7) ,p.126- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19570700-0126

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文献の提示、内容紹介、資料分析等の苦心は、恐らく多大であり、同學者を稗益する所絶大である。本邦フランス史學界は本書によつて一應の分水嶺に來た譯であるが、既に周知の如く、一部ではルフェーヴル批判まで進んでゐる情況からすれば、オーラール以降、特にマチエの學説以降により紙數を費して頂きたかつたと思ふのは一人筆者のみではないやうにも思はれる。最後に平常何かと御指示を賜つてゐる著者に、放言を呈したことを御詫び致すと共に一日も早く、二十世紀前半の革命史學史の完成せられんことを御祈りする次第である。

（鈴木泰平）

近世漁村史料の研究（野村豐著　三省堂發行）

——大阪灣沿岸漁村學術調査報告——

著者は近畿大學に教鞭を執る餘暇に、山漁農の三村に於ける近世庶民史料を蒐集し、其の生活探求の業績として鄕里の河内國石川村學術調査報告を始め、大阪府を中心として寒天・村落・水利等の蒐集史料と其の研究を數冊學界に提供されたが、今次、其の姉妹篇として大阪灣南部の泉州灘に臨む忠岡浦・脇濱浦・岡田浦・尾浦崎等の拾數ケ浦に、數年間親しく歴訪蒐集の庄屋・年寄・問屋等の舊家三拾余軒に殘存の萬餘の文書中、主要な浦方文書約四百通（文祿三—昭和八）を收錄（史料篇）更にこれを分類して左の十余項に就ての研究（研究篇）を卷首に錄し、更に覽者の便に、事項別・年代別の兩索引を卷尾に附して印行（五六〇頁）學界に稗益された。

（各説）關東出稼—漁魚拾分一—打瀨綱出入—濫獲防止—かまぼこ—浦論—流寄物—船改—高瀨船通用願—防潮堤—海岸の侵蝕（餘論）不渡米—板子一板下は地獄。

次に一讀興味あるものゝ一、二を略記すると、出稼では、九十九里濱は勿論のこと、遠く北は奥州兩沿岸より南は對馬に米鰯等を買い、又、藍玉・黑江椀・紀州密柑・材木等を賃積している。漁魚拾分一では、浦方古法の拾分一も、幕末には村方小前に對抗の力も減じ、その半分を村方支配に讓り、遂には祖先傳來の浦方支配權利を他に讓渡する舊庄屋の盛衰を知る。打瀨綱出入では、泉州獨特の打瀨綱は尼崎うたせ漁師との爭論により、近世初期頃尼崎邊で考案されたものゝようで、二里八丁が泉州海岸浦方の領海として他より保護されたことを知る。「かまぼこ」では、舊幕時代は鱧が使用され、一枚代銀一匁貳分位で、其の永持美味について「春秋冬者御江戸表えも屆き申候かまぼこ之義者、とら屋之饅頭之樣成ものにて、日數者何日にても相持候得共、かたく相成申候、御用ひ之節者湯にて、とくとむし候得者、やわらかに相成申候…（寛政十年）と記されている。高瀨船通用願では、延享の

頃尾崎浦の庄屋吉田九右衛門が「あんかう」と稱する拾貳石積小船五拾艘を拵へ、京都堀川筋の通船を江戸表に出願し、この結果は文書では不明であるが面白い。この外に參考となり、又興味を覺える文書が多數であるので、浦方研究者に必讀をすゝめる。

終りに著者の度重なる足勞筆勞に對して深甚の敬意を表し、三村研究の大成を待望する。

（武田勝藏）

八幡宮の研究（宮地直一著　理想社刊）

昭和三十一年十二月發行、A5判、三二九頁

一

我が國における神祇史の考證的研究は伴信友をもつて嚆矢とするが、彼にあつては史料の不足という點において聊か難點があり、明治時代における栗田寛の研究は、極めて該博なる知識をもつてなされた斬新な學說ではあつたが、なお史料の檢討という點において多少疑問を起さしめるところがあつた。しかるにこれら二先學を超え、科學的な考證のもとに多くの史料を驅使して、精緻なる研究を發表した第三の碩學は、實に故宮地直一博士であつた。

戰前における神祇史の研究は、博士を中心として順調にすゝめられていたが、終戰を期として不當な壓力を蒙り、その成果を十二分に發表出來ない樣な狀態にたちいたつていたが、十餘年を經た今日、漸く新研究が發表される樣になつたことは、いかにも喜ばしい限りである。

この時宮地直一先生遺著刊行會より遺稿集第一卷として、著者の學位請求論文たる「熊野三山の史的研究」が昭和二十九年十月國民信仰研究所より刊行され、今又遺稿集第二卷として「八幡宮の研究」が昨年十二月理想社より刊行されたことはまことに意義あることである。

二

さて本書には八幡宮關係の論文六篇がおさめられ、第一の「八幡信仰の起源並びに發達」は、博士が京都大學における神道講座の昭和十三年度の講義案よりの拔抄である。第二の「八幡宮の研究」は博士が明治四十一年七月東京帝國大學文科大學史學科における卒業論文であり、上は八幡神の出現より下は室町時代にいたるまでの八幡信仰の變遷を五篇二十四章六十六節に分つて詳述した大論文である。このうち第四篇第一章「源氏と八幡宮との關係」のみは補正されて、翌年史學雜誌第二十編に「清和源氏と八幡宮との關係」と改題して連載せられ、更に改訂されて「神祇史の研究」（大正十三年）に、その上に又改訂されて「神道論攷」第一卷（昭和十七年）に收錄されている。第三の論文「東大寺八幡宮の鎭座について」は寧樂第八號に昭和二年六月發表したものであり、第四の「鶴岡八幡宮領に於ける分社の一例」は昭和三年一月國學院